中山道間の宿　新加納
まちづくり会かわら版

第３号
平成２４年
６月２３日
発　行
新加納まちづくり会
会長　小島秀俊

中山道間の宿

新加納歴史のまちづくり
いよいよ工事が始まります。

各務原市の「重点風景地区」に指定された以降、まちづくりワークショップが開催され、市の計画「修景整備・サイン・中山道の美装化(案)等」について、地域の皆様と共に要望し検討してきました。今年からいよいよ工事が始まります。

中山道に道標、案内版設置

各務原市は今年度、中山道と新加納地内の2か所に標柱(ゲートサイン)
そして、7か所に道標、3か所に案内板を設置します。

昔の街道をしのぶ道づくり

中山道桝形部(今尾医院前)１００ｍを昔をしのぶ道づくりとして、早期に計画を詰め着手します。(下イメージ図)

坪内陣屋史跡に歴史学習の公園整備、濃川橋架け替え

新加納区画整理地内に、旗本坪内陣屋史跡をしのぶ歴史学習公園に必要な用地(５００坪)が、区画整理組合・ナベヤ工業・各務原市のご協力により確保できることになりました。
南側市道の拡幅改良工事、濃川橋の架け替えから着工となります。

通学路の整備と新加納駅前広場の新設

中山道から長塚新田の県道１５２号線までの７００ｍ、通学路の交通安全整備が行われます。又、新加納駅前広場も新設され、美しく安全な路が確保されます。

西部幹線道の整備に着手

交通量が多く事故発生率の高い市道３７８号線、イチョウ通りから中山道までの１１００ｍが、歩道付き２車線に整備されます。
中山道から国道２１号までの県道もあわせて整備される予定です。

怖かった二か月間

新加納駅南、西田商店横の狭く危険な交差点のカーブミラーが突然撤去された。心配した事故も発生。二か月間多くの皆さんが怖い思いでここを通りました。
関係者の努力で四月に復旧しました。
移転先の地主小島正敏様のご協力に感謝します。

新加納の小学生９５人が通学している。

中山道桝形部　市道那 435 号線
（東西の道）イメージ図

完成した浜見公園

永年にわたる自治会や地元の皆様の努力により、浜見町に待望の公園ができました。
７月２８日(土)開園します。
地域の老若男女が自由に集い、美しく楽しく利用したいものです。

『こども歴史学級』７月下旬開

『新加納の歴史とお殿様のはなし』『竹トンボ飛ばし』

・日時　７月下旬予定
・場所　日吉神社、ふれあいセンター
・対象　新加納町、浜見町、日吉町の児童
★主催　まちづくり会
児童部　岩間、村瀬　川島

中山道「歴史の道見学会」９月開催！

昔をしのぶ美濃の中心『垂井宿』を訪れます。

・日　時　９月２５日（火）
・見学先　中山道垂井宿外
・参加者　３０名程度

（申込）
案内書を後日配布します。

読み捨て 新加納歴史まめ事典

No3
制作
まちづくり会
歴史担当
新加納の歴史に関係する資料、ご意見をお寄せください。

江戸時代新加納は中山道の立場（たてば）。一里塚、松並木も

道標、カギ型などの街路は今も残る

石の道標　今尾医院の東側の路傍に「左木曽路、右京道」と刻まれた石の道標(図1)があります。江戸時代のものと思われますが、いつの間にか所在不明なり、戦後発見され、割れ目を補修し現在地に建てられました。石の道標としては小ぶりですが中山道を案内しています。中山道は木曽路（岐蘇路）とも呼ばれ、京道は江戸と京都を結ぶ街道であることを示しています。

図1　新加納の道標

加納宿と鵜沼宿の間　中山道は江戸の日本橋から京三条大橋までの、約532kmで、この間に六十九（草津から東海道に合流、六十七宿が中山道)の宿場が設けられました。岐阜県内は落合宿から今須宿までで美濃十六宿といわれます。そのうちの鵜沼宿から加納宿までの四里十丁（約17km）間に新加納は位置し、両宿のほぼ中間です。まさに間の宿（あいのしゅく）です。

宿場は一里（4km）から二里の間隔が普通ですが、鵜沼、加納宿間は、中山道では二番目に長い間隔です。これは多分この間は地形が平坦で通行しやすく、また、各務原台地は水が得にくいため居住に適しなかったからでしょう。

新加納に立場　立場は、宿場間に通行する人や馬が休息するために設けられた施設です。幕府が十九世紀初期に作成した中山道分間延絵図の新加納村に、立場の文字(矢印の下)が一里塚(北側)の東に記されています。

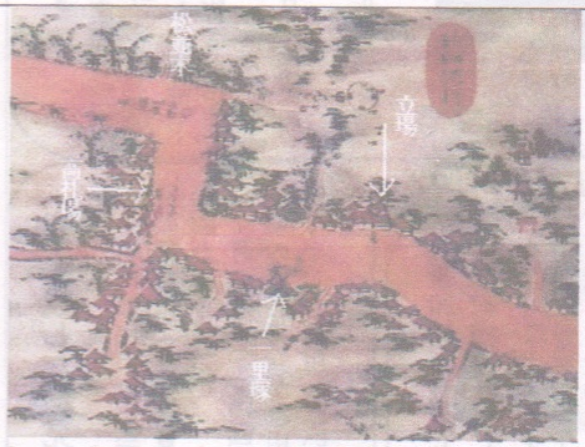
立場がいつ頃から設けられたかはわかりませんが、宝暦六(1756)年の「木蘇路安見絵図」にも一里塚に隣接して立バがあります。新加納のほかに各務原台地には、六間茶屋と二十間茶屋が地名として記され、中山道筋で湯茶の接待がされていたようです。

分間延絵図作成のために享和元(1801)年に新加納周辺の村々が書き出した事項の中に、「往還立場、更木新田煮売茶屋渡世仕候」とあり、更木新田の位置は不明確ですが新加納の立場では煮売茶屋が営まれていると記されています。

天保十二(1841)年の史料に、煮売茶屋の営業を差し止められた新加納村「梅村屋」仁兵衛と利兵衛の営業再開を加納、鵜沼両宿問屋などの連名で新加納陣屋へ陳情したものがあります。これから新加納の立場では軽食堂(立場茶屋)が通行する人々に便宜を供していたことがわかります。しかし幕府は、原則として宿場以外での宿泊、飲食の営業を認めず、度々禁令を発しており、この時の差し止めもそれに従ったものと思われます。

一里塚と松並木　幕府では道中奉行を置き、五街道などの幹線道路や宿場の管理に当たらせており、そのひとつに沿道に一里塚を築き、松か榎木を植樹しました。新加納には、榎木が植わっていましたが今は痕跡もありません（ふれあいバス新加納駅南停留所の横に標柱が立つ）。

また、人家の途絶えた街道の両側には松並木が造成されているのが絵図からわかります。松並木の一部は昭和二十年代初めまで新加納の東西に残っていました。



幕府はこれらの維持、管理や街道の清掃、補修などを沿道と近隣の村々に割り当てており、村人が行いました。

（上の図は絵図から部分的に切り取ったものです。）